

文芸における偶然と必然

西郷竹彦

大阪江坂 サニーストーンホテルにて
二〇〇四年三月二十九日

文芸の筋とは

最初に概論を述べて、それから一つひとつの作品について具体的に触れていきなさいと思います。文芸研のみなさんは部分的にわかっているところもありますが、講師の小林直樹さんに説明しておいた方がいかなと思いますので、まず「文芸の筋における必然と偶然」ということから始めます。

文芸の筋というのは諸説あって、ほとんどがフランスから始まりました。一九六〇年代、ナラトロジー（物語論）といますが、これを含めてほとんどの学流が筋を事件の筋と言っています。事件の継時的展開を基準にして、それが行きつ戻りつするいろんなタイプがありますから、それらの分類を行って、錯時法とかいろいろあります。こういうのが今の筋に関する理論です。これはみなさんがご存じの通りです。

さて西郷文芸学においては、筋をどう定義しているかといえますと、「筋というのは形象相関の展開の過程」だと定義しています。「形象」というのは作者によってまた読者によって意味づけられたイメージです。ただのイメージではありません。意味づけられたイメージです。人物のイメージとか、ものごとのイメージです。それが絡み合って、それが変化・発展・展開していきます。それを筋というふうに定義しています。

人物像・人物の形象と世界像・世界形象とがしだいにふくらみ、ゆたかに、彩りあざやかに形成されていく過程・プロセスが筋である。イメージ化していくのは読者がイメージ化していくわけです。そのプロセスはけっきょくは、共同体験していく過程です。悲しい話を読めばもらい泣きをします。おかしい話だと腹を抱えて笑うというのは体験しているわけです。文芸学ではイメージの筋とか、共同体験の筋というふうに呼んでいます。

ところで、筋とは、作品の中に実体的に、客体的にあるものではありません。牛肉の中の筋を剥くように作品の中に実体的に筋が存在するものではありません。読者が作品と対話しながら自分の意識の中に形成していくのが筋です。極言すれば、筋は読者の数ほどあるといえます。当然、初読の筋と再読の筋とは違ってくる。初読のときがイメージ・体験をつくっていく筋、プロセスであるとすれば、再読はそれを深く意味づけていく過程、つまり意味深化の過程であるといえます。

以上のことで一応筋ということをおさえました。さてその筋における必然と偶然ということにこれから話を進めたいと思います。

文芸の筋は必然的なもの

筋における必然と偶然をどう考えるかということですが、文芸作品における事件とか、出来事・〈事柄〉、作品の中に書かれていることです。これが、どうも現実の事件・現実の事柄と虚構の世界の事件・〈事柄〉とチャンポンになってしまっている、混同してしまっていることが非常に多いのです。いつの間にかそういうふうに着ているというか混同しています。やはりそこははっきりと分けて考えた方がいいのです。

どういふことかといいますと、そこで語られているものごと・事件もすべて、語り手によってイメージ化されます。しかも意味づけされたものなのです。現実の生身の事件というのは意味をもっていません。意味というのはあるのではなくて、意味づけるわけです、人間が、読者が。ですから生の事件というのは意味もなくそこに存在しているわけです。それを意味あらしめるといいますか、意味づけるのは人間がすることなのです。

そうすると作品の中の出来事というのはすべて語り手つまり作者によってすでに意味づけられているわけです。しかしまたそれを読む読者がさらに自分なりの意味づけをしながら読んでいきます。意味づけられたイメージです。ここをその生身の事件、生身の事柄とはっきり区別した上で考えていかないと理論の上で混乱が起きます。ですから私は、生身の事柄ではない事柄は括弧に入れて〈事柄〉と。虚構の〈事柄〉ということです。文芸における〈事柄〉の筋というのは、語り手によって意味づけられている以上その展開は必然的なものとして理解すべきです。これは結論を言ってしまったわけですが、どうして結論的なものとして理解するかということはこの後具体的に話します。語り手によって意味づけられている以上、その展開が必然的なものとしてあるのだということなのです。

たとえば現実にはありえないファンタジーがあります。幻想的な作品です。あれこれの書かれている関係は、例えば因果関係です。ファンタジーの中では、現実的に見ると大変荒唐無稽に思われることがいっぱいあります。だけどそれらの〈事柄〉、〈事柄〉というのはイメージ化されている〈事柄〉です。意味づけられている〈事柄〉の間の関係は筋の上では意味的に必然的なものと見るべきです。これは結論だけ言っているのです。これから実証しますからね。

偶然の必然化

たとえば語り手がわざわざこのことは偶然のことだと断って語る場合があります。誠に不思議なことだがとか、誠にあり得ないことだがとか、たまたまこうであるとか、わざわざそれが偶然であるということと断ることさえありますが、その場合でもその〈事柄〉の意味するところは、筋の上で必然的なものとして設定されていると考えべきです。

虚構としての文芸においてすべての〈事柄〉は、形象相関、イメージが響き合い絡み合い全一体となるという原理によって、イメージと意味の上で必然的な相関関係をもって相互に緊密に結びつけられています。したがって筋の中に位置づけられた〈事柄〉のすべてが主題によって統一されているのです。テーマによって統一されています。読者にとってその〈事柄〉がいかに荒唐無稽に見えようとも、現実の感覚でそんなことはあり得ない、そんなことは出鱈目だというふうに見えようとも、偶然的なものに見えたとしても、ある人物にとって筋の上で必然的なものとしてあります。このことを私は「筋における偶然の必

然化」といふ言い方をしています。偶然が必然になる。偶然の必然化と。

これがキーワードです。つまりある人物にとってある〈事柄〉がたとえ偶然であったとしても、筋において、ということとは読者から見、読者にとって、それが必然的なものと考えられるし、また考えるべきです。作者がいちいち意味づけするとは限りません。イメージで先取りしてイメージで書いていって、意味は後から追っかけていくといひますか、後から意味をひねり出すとかいふようなケースがあるわけです。これは自分で実作してみても痛感するのですが、いちいち計算尽くで書いてあるわけではありません。だから意図しなくとも読者に深い感銘を与える作品は、読者がそれらの〈事柄〉の一つひとつを必然的な関連をもつものとして意味づけるでしょう。またそういう作品でなくては、作品としては失格だともいいたらいいのでしょうか。主題をとらえる読者の主体的な読みの姿というふうに言ってもいいです。現実の生身の世界に起きた事件・出来事・事柄、たとえ偶然的なものであってもそれが言葉によって形象化、イメージ化された〈事柄〉は、語り手世界、虚構世界において、主題にとって必然的なものとなります。つまり作者によりかつ読者により意味づけられるものとなります。形象相関全一性の原理において、すべてのイメージは響き合い絡み合い全一性なものとなります。この原理において展開する筋に位置づけられたすべての〈事柄〉は、つまり形象は、たとえ偶然に見えるものでもすべて主題によってテーマによって必然的なものとして意味づけられます。それを「主題による偶然の必然化」と名づけています。

たまたまと書いてあっても偶然ではない

そこで「花いっぱいになれ」です。これは児童文学者で民話の研究者としての松谷みよ子さんのよく知られた童話で、小学校一年の国語教材にも採用され広く読まれている作品です。小学校の子供たちが花いっぱいになれという願いを込めた手紙を同封した花の種を風船につけてとばします。ところがその中の一つだけが、へどうまちがえたのかと書いてありますが、町を通り過ぎてということとは人のいないところ、人のいないところというのは手紙に託したことが無意味になることです。手紙を読んでもらって種を植えてもらわなくてはいけません。町も村もすぎて人のいない山の中に落ちたというのの子供たちから見れば無意味な結果になったわけです、願いに反する結果に。ところがたまたま、たまたまというのの偶然ということ。たまたまそこには子狐のコンが居眠りをしていました。風船がそこに落ちたということとコンがそこに居眠りしているということとは何の関わりも、因果関係もありません。たまたまそこが、これを出会いの偶然といひます。それぞれすべての系列があってもそれが交差した交点、この交点が出会いの偶然と名づけられるわけです。

みなさんにお配りしました九鬼周造の「偶然性について」という文章がありました。これは後でまた読んでみてください。もつと関心のある人は、岩波書店から『偶然性の問題』戦前に出た大変古い本ですが、これを読まれたらいいと思います。哲学の本です。『いきの構造』という文芸の方でも非常にユニークな本を書いています。それもまたついでに何かのときに読んでみてください。

そこで出会いの偶然ということになるのですが、小ぎつねのコンが居眠りをしていました。風船を知らないコンは、真つ赤な花とまらちがえしました。花のことは知っています。でも、小ぎつねは、人間の世界を知らないわけですから風船を知りません。その紙袋を根っ

こと勘違いして、丁寧に土に埋めて水までかけました。そのことが結果として、結果としてというのは、つまりこれが根っこだと思つたから水をかけたのです。だけどそれは結果として種子の発芽を促しました。本人は種に水をやったのではありません。根っこのつもりで、根っこに水をやりました。それがたまたま結果として、これは偶然ということをおうとしているわけですが、たまたまそれが発芽を促して芽を出すということになるわけです。やがて芽がたくましく成長してお日様のような花、ひまわりの花になりました。秋になっておいしい実をいっぱいならせました。

この風船が子供たちの期待に反して山にとんでいったというのは偶然ですけれども、その出来事というのははしかるべき気流の関係で、そのこと自体は物理的必然の結果なのです。ちゃんとした理由があつて、こうなっているわけです。氣象的に、物理的に説明できる結果です。しかし人に拾われて種を植えてもらいたいという子供たちにとっては、たまたまの結果、偶然になつてしまつたのです。口惜しいことです。しかしたまたまそこにコンが居眠りしていたことはもつちの幸いでした。運命にもいろいろあつてこんなのを、幸運ととるか悲運ととるかは人によつていろいろです。さてもつちの幸い、もつちの幸いというのは、子供たちにとつて、読者にとつて、偶然でたまたまのことではあるがそこにコンがいてくれたという言い方は何ですが、いてくれたわけではないのですが、そういうふうになつてくれた」と意味づけること自体、この物語の展開にとつて奇しくも必然のことであつたといえます。

風船を知らないコンは赤い風船を赤い花と勘違いし、種子を入れた白い袋を根っこまぢがえて土に丁寧に埋め水をかけやります。しかしそれが結果として種子の発芽を促し、くどいようですが種子は芽を出し、ここにも偶然が重なります。やがて芽はすくすくと伸びて花を咲かせます。たまたまそれはひまわりの花でした。芥子の花である可能性もあるわけです。ですけども、それはひまわりの花であつたということは、これは偶然であるわけです。

だけどそのひまわりがやがて熟して、おいしい実をいっぱいならせませす。それも結果としておいしいものをいっぱい食べた夢を見た小ぎつねの夢を実現したことになります。しかし赤い風船につけた種子がひまわりであつたこと自体必然といわざるを得ません。まさにこれもいくつもの偶然の積み重ねといえましよう。この偶然の累積をしかし読者の誰一人として怪しむところか、むしろある感動をもつて読み終えるのです。

それはなぜか。そこにこそこの偶然の、虚構としての意味が潜んでいるといえましよう。「花いっぱいになあれ」という子供たちの願ひは、世界を美しく彩りたいという人間誰もが共通に抱くであろう願ひでした。この願望は読者の潜在的願望でもありません。

読者もいわれてみますと、ああ、世界が美しく花いっぱいになつたらいいなあ、というふうを意識、自覚しているわけではなくても、そのことに触れると、ああそうだ、自分にもそういう願ひがあつたなど。そういうのを潜在的願望といひます。つまりそれは人間普遍の願ひです。誰もが共通にもつて願ひのことを理想といひます。人間普遍の願ひ、理想である。何よりも読者がこのような結末を密かに願つていたといえましよう。

物語を読む時にはないでしょうね。読み終わった時に、潜在していた願望が実現した喜びというものが読者の中に生まれるわけです。作者の意図もおそらくはそこにあつただらうと思われます。これはどうでもいいことですが、すけれども。

さて小ぎつねも花を愛する人物です。これは大事なところですが、風船を赤い花とまちがえます。でも、もし花を愛するものでなければほったらかしです。だけど花を愛しているからこそ、わざわざ丁寧に土に埋めて水をやるわけです。でも風船を花とまちがえたということは読者の笑いを誘うわけですけれども好感を持って小ぎつねの行為を見守ります。それはそこに花を愛する心が共通するからです。偶然によって小ぎつねの願いと子供たちの願いがつながりました。小ぎつねの夢というのは、夢は理想ともいいます、願いの表れでもあるのです。夢はおいしいものをいっぱい食べたいということです。村の子供たちの願いは花いっぱいになれということです。願いは具体的には違うのだけれども、そこに共通するものはどちらも花を愛する心です。そういうものが一つとなつてつながります。つまりこのことによつて作者の意図したであろう夢、作者の夢です、もこのような形で結実したのです。つまりこのような筋立てにおいてすべての偶然が必然化することで主題が完結したのです。これを私は偶然の必然化といっているわけです。

読者も虚構する

もう一つ「三つの願い」というのがあります。あれはどう見てもみなさん三つとも偶然のことであるというのはいわゆる客観的に読者が見たところあれは偶然です。でも主人公はそれを自分の願いが叶ったというふうに興味づけて、もちろん読者の中にも、幼い読者の中にはそのように興味づける者もいるでしょう。またこれを現代の奇蹟としていっせいに願いがかなった不思議な話として考える者もあります。読者もいろいろです。幼い小学校低学年の読者ですが、つまり現実とも非現実とも取れる世界として享受した読者にとつてこの世界はファンタジーとなります。

ファンタジーというのは現実と非現実のあいだに成り立つというのがファンタジーの定義です。定義というのは人によつていろいろですから、これは西郷文芸学における定義です。

一方主人公の思い違い。あんなのは思い違いだというふうにとるのもしょうがありません。その場合にはどういう作品になるかといえますと、ユーモア文学あるいは風刺の効いた作品というふうに思われます。ファンタジーというジャンルがあります。それからユーモアというジャンルがあるというふうにとつて固定して考えてはいけません。その作品がどう読まれるかによつて、それがファンタジーともなればユーモアともなるし、諷刺文学ともなるのです。客観的に存在するわけではありません。

ユーモアといってもユーモアのわからない人にとつてはユーモア作品ではありません。なんだこれは、アホみたいな話だ、というだけです。

一方主人公の思い違いととる者ももちろんあります。読者によつてさまざまです。その場合作品はユーモアになります。このように虚構としての文芸の世界は読者において、諷刺文芸ともなればファンタジー文芸ともなります。このことを「読者も虚構する」といいます。

ところで願いといても他者に迷惑を及ぼすものは真の願いとはいえません。お互いの幸せに通ずることが真の願いといえましょう。ちなみに特定の人間の願いとどまらず、それが万人の願いとなる時に理想と名づけているわけです。

この物語の三つ目の願いこそは、人と人を結びつける愛の心の表れといえるでしょう。

偶然の必然化は意味づけの方法

それから最後に「あとかくしの雪」木下順二さんの作品です。これは拷問で亡くなったプロレタリア作家の小林多喜二が、「十一月二十三日のこと」というエッセイを残しています。それは新潟の自分のおかあさんが語ってくれた話を書きとめたものです。それを木下順二が、それをモチーフにして「あとかくしの雪」という作品を書いたのです。もとの話では弘法大師伝説になっているのです。弘法大師が各地を巡って、その中でいろんな奇蹟を生み出すところがありますが、その弘法大師であるというふうにもとは語られていました。それを木下順二が弘法大師としないで、旅の貧しい坊さんにしたのです。そういうふうにするにより意味があると考へてのことですけれども。それで貧しい百姓は、うちでは何のもてなしもできないよといったものの、何かもてなそうと思つて、隣の富める百姓の家の囲つてある大根を一本盗んできて、食わせることになりました。

しかしこれ、たとえわずかに一本といえども盗みは盗みです。また飢えた人のためにという、ジャンバルジャンみたいですが、理由があつたとしても悪は悪です。ただ悪というのは、社会的なひとつの規範で、すべての社会において、いつも悪とされているというものではありません。悪というのはそういうふうには独自のものです。そういう意味で条件的なものです。

この話を語っている語り手たちの世界、現実の世界においては、盗みはやはり悪として、罪として罰せられます。人から後ろ指を指されるといふ罰です。

しかしまあ、たまたま、ここでたまたまというのは偶然という意味です。たまたま降り出した雪が、百姓の盗んだ足跡を消してくれました。雪は何も消そうと思つて降つたわけではありません。雪に意志があるわけではありません。偶然、たまたまそういうことになつたのです。

氣象学的には必然的な現象であつて、その雪が降つたというのは降るべくして降つたのです。だからそれはこの出来事に、この出来事というのは百姓がそういうふうにして盗つたということにとつてはたまたま、偶然のことです。しかしなぜこの偶然の出来事を語り伝える民衆はこの雪をあとかくしの雪と名づけて、しかも赤飯まで炊いて祝福するのかという事です。

実はそこでわざわざ十一月二十三日であつたと語られているのは、意味があることで、今でも地方に行くときやっているとありますが、「二十三夜待ち」といって、旧暦二十三夜というのは、明け方近くになつて月が出ます。その月が出るまで起きていて、お供え物をして、人々が幸せを願つたわけです。特に旅にある人の無事を願つた、自分の幸せを願いました。その願いが叶えられるのが二十三夜なのです。特に旧暦十一月、霜月といいますが、霜月二十三夜というのは特別に盛大にお祭りされました。特別な意味をもつた日です。このあとかくしの雪が降つたのは、これはたまたまです。作品にも書いてあります。「たまたまその日は」と書いてあります。へたまたまその日は旧暦の十一月二十三日のことであつた」と。ただ十一月二十三日のことというだけでは、ああそうかということになつてしまいます。「霜月三日」の意味がわかっているのとわかつてないのではまるっきり受け取り方が違つてきます。霜月三日というのは、いま言ったようにそういう意味をもっている日です。その日に雪が降ります。実はその日に百姓が大根を盗ってくる。というふうには偶然が積み重なっているわけです。でも、それをなぜ民衆は赤飯を炊いてまでお祝いするのか、ということですが、

ここに日本の民衆の思想がありますが、これは中国にもあります。中国から日本へいろんな文献を通して入ってきて、王朝時代から日本の知識人たちに広まり、それが民衆の思想にまで浸透していききました。「天人合一」の思想です。天と人が一体である。天が人の心をわが心として雨を降らす、雪を降らす。そういう思想があります。これもその中のひとつであろうと思います。

例えば恋人が遊びに来ていて、もうそろそろ時間だと。帰らなくてはならないと。やはり帰りたくないでしょう。また帰りたくない。こういう時に雨がふると、これを日本人は「遣らずの雨」といいました。

私がソ連にいた時に、モスクワ大学の学生に遣らずの雨の話をするの大笑いするのです。そんな雨があるものかと。それはないですよ。そんな雨。ですけども日本人は、そういう時それを遣らずの雨と言ったのです。ああ、雨が降ってきたからちよつと帰るのを待とう。それはよかつたもうちよつといなさいよというふうに、男女の間の。それがつまり帰りたくない、帰したくない、という心を天が、天というのは空という意味ではありませぬよ、天がその心をわが心として、一体として雨を降らせました。だからそれを遣らずの雨とこういいました。あとかくしの雪もそういう。つまり民衆がこの偶然を必然化したわけです。必然化したというのはひとつの意味づけの方法と言ってもいいです。そのことによつて何かもたらされるかです。

それを祝福するという民衆の心、それを祝福される祝福するどつちも民衆ですけれどもその関係が大変すばらしいと思うのです。

以上です。

詩とはなにか

詩を書き出してから、すでに四十年に近いのであるが、さてしかし、詩とはなにかと来られると四十年の年月もぐらつくみたく先ず、当惑をもって答えるしかないのである。ではなんのために詩を書くのかと来られてはこれもまた直立不動の姿勢にでもなつて、ただ口をもぐもぐしているよりほかはないみたいなのである。

詩人のくせに、はなはだみつもまないようであるが、実は詩人だからこそそうなのであって、詩とはなにかと問われても、ちよつと一口では答えられないものがあるからであり、なんのために詩を書くのかと問われても、それらの答えは、灰皿やマツチみたくに、すぐに出せるものではないからなのである。つまりは、詩とはなにかといわれても、詩の定義はむずかしくて、四十年の詩作をもつてしても答えることが困難なのである。

たとえばある詩人によると、詩は叫びであるといふのである。そうかとおもうとある詩人は、詩は怒りであるといふのである。また詩は美であるといふのもある。あるいは、散

文であつても小説であつても、あの特定の審美的情緒を感じさせるものがあれば、それを詩といつてもよいという風なのもある。また、詩は批評であるとするものもある。

またある詩人は、精神のある状態の記録であると説明する。そしてまたある詩人は、詩は経験であるといふのである。またある詩人にとつて、詩は美や真実をもとめる人間感情の純粹な表現であるといふ。ある詩人は、詩は青春であるともいふのである。数えあげると、おそらく詩人の数ほどいろいろあるに違いないのである。

そんなわけで、詩とはなにかと問われても、誰もが詩とはこれだと答えられるような定義というものがあるのではないからなのである。といふことは、それほど詩の定義づけはむずかしいといふことなのであつて、詩人の間ではむかしから、詩とはなにかが問題にされつつけて来たのであるが、その答えは前に述べたいいろいろの例のように、各人各様に試みられてゐるに過ぎないのである。

そこで、話はばくのばあいなのである。四十年近くも詩を書いて来たとはいふものの、正直なところ、詩とはなにかと問われると、問われるたんびに戸惑いしないではいられないのである。しかし、それでも詩を書いて、詩人のつもりで生きて来たのだとおもうと、そこに詩を投げ出して逃げ出したくなるのであるが、なにしろ何十年も歩いて来た道なのである。引返すことはすでに不可能なことであり、いまとなつては飛び込む横丁もない始末なのである。

そういうばくにとつて、出来ることはただ一つ、詩を読んでもらいたいと、答への代りにおすすめるより外にはないのである。

いかに、ずるいみたいであるが、やむを得ないわけで、詩とはそういう風にして自分の手できわり、自分の眼で見てわかるものなのであって、問いに対する答えを待っていたのでは、何年経っても実感としてはわからないのではなからうか。

ぼくが詩を書くようになったのは、詩とはなにかということ、それがわかつての上で書いたのではなかった。わかっていたにしてもそれは、小説よりもうんと短いもの、そして、一行一行が行わけにして書かれたもの、それが詩であるぐらいの程度なのであったが、その程度のこと、当時の生田春月の詩から得たところの実感なのであった。詩を象にたとえて見るならば、詩人は群盲なのかも知れない。

それでも手にふれてはじめて知ったそれが、行わけの短い形であったということはいわば詩のしっぽか足の皮であったかもしれないが、それを手がかりにぼくは詩の世界に足をふみこんだのである。つまりは、詩とはなにかもしらないうちに、書きたくなくなって書くようになったのが詩なのであった。

いわば、書かすにはいられなくなって書き出したのがぼくの詩で、かゆいところを掻き出したのが病みつきになったみたいなものなのである。それはぼくに、美感というよりは快感をあたえたのである。よくはまだぼく自身にもわからないのであるが、ぼくはいまだ

も、あるいはこの快感のために、詩作をしているのかも知れないのである。ぼくは常々、詩を求めるころは、バランスを求めるころであるとおもっているが、そのころは、かゆければ掻きたくなり、いたければさすりたくなるころのようなものだからである。

こうして、詩人としてのぼくはいかにも自然発生的で、詩とはなにかも知らなければ、なんのために詩を書くのかも知らない詩人なのではあるが、それでは詩を書く資格がないじゃないかといわれたりする、資格で詩を書く詩人もあるようである。

さて、詩人としてのぼくの仕合わせは、たとえ詩を書く資格がないにしても、詩を書かすにはいられないというそのことなのである。ということは、バランスを求めるころが、ぼくにそうさせるのではなからうかとおもうのである。ぼくの経験によると、人間は生きていくと、あっちもこっちもかゆいのである。生活を見てもそうなのであって、かゆかったり痛かったり、痛がゆかったりで、なんとかしなくてはならないことばかりである。

ぼくはかつて次のような「座蒲団」という詩を書いたことがある。

土の上には床がある

床の上には畳がある

畳の上にあるのが座蒲団でその上にあるのが楽といふ

楽の上にはなんにもないのであらうか

どうぞおしきなさいとすゝめられて

楽に坐つたさびしさよ

土の世界をはるかにみおろしてゐるやうに

住み馴れぬ世界がさびしいよ

この詩は題の示すように、座蒲団を取り扱つた詩であるが、作者がいかにか座蒲団とは縁の遠い生活をしていたかがうかがわれるのではないかとおもふ。上京してから何年というほど屋外に住んでいた浮浪者のぼくが、就職の件で先輩の家を訪ねて、久し振りに座蒲団の上に坐つたのであったが、自分ながらあの頃の生活のかゆさがおもい出されるのであ

る。

またぼくはある時間を、汲取屋になつて生きた。むろん好んでのことではなかったが、自殺の見込みのないぼくにとつては、なんでもするより外にはなかったのである。人類は鼻など持っているために、こんな臭い仕事とおもわないのではなかったのであるが、鼻をなだめすかして汲み取るより外には術もなかったのである。まもなく出来た詩が「鼻のある結論」というのである。

ある日

悶々としてゐる鼻の姿を見た

鼻はその両翼をおしひろげてはおした、んだりして 往復してゐる呼吸を苦しんでる
た

呼吸は熱をおび

はななかべを傷めて往復した

鼻はつひにいきり立ち

身振り口振りもはげしくなつて くんくんと風邪を打ち鳴らした

僕は詩を休み

なんどもなんども涙をかみ

鼻の様子をうかゞひ暮らしてゐるうちに 夜が明けた
あゝ

呼吸するための鼻であるとは言へ

風邪ひくたんびにぐるりの文明を掻き乱し

そこに神の気配を蹴立て、

鼻は血みどろに

顔のまんなかにかんばつてゐた

またある日

僕は文明をかなしんだ

詩人がどんなに詩人でも 未だに食はねば生きられないほどの
それは非文化的な文明だった

だから僕なんかでも 詩人であるばかりではなくて汲取屋をも兼ねてゐた

僕は来る日も糞を浴び

去く日も糞を浴びてゐた

詩は糞の日々をながめ 立ちのぼる陽炎のやうに汗ばんだ
あゝ

かゝる不潔な生活にも 僕と称する人間がばたついて生きてゐるやうに
ソヴィエット・ロシヤにも
ナチス・ドイツにも
また戦車や神風号やアンドレ・ジイドに至るまで
文明のどこにも人間はばたついてゐて
くさいと言ふには既に遅かつた

鼻はもつともらしい物腰をして

生理の伝統をかむり

再び顔のまんなかにかんばつてゐた。

この詩を読んで、読者は即座に鼻をつまんでそっぽを向いてしまふのかも知れないが、
作者のぼくとしてはそれを無理に、この詩から美を感じてもらいたいと読者に対して頼む
わけにはいかないのである。なぜならば、それはまったく詩そのものの罪なのであって、
ぼくのとるべき責任ではないからなのである。

汲取屋のぼくはただかゆいところを探しあてて、そこに鼻の問題のあることを見つけ、
文明の問題や人間の問題などのあることを見つけたりして、自分なりの感想や批判をもつ

て書いたまでのことで、言葉をかえていうならば、かゆいところを搔かないではいられなかったのである。しかし「鼻のある結論」にしても「座蒲団」にしても、詩とはなにかの問いに対して十分に納得のいく答えであるかどうか、いささか気のひけることではあるが、多少なりとも読者の共感をそそるものがあるとか、味わいをそそるようなところがあるとすれば、どうにか詩らしいものになっているのではないかとおもうのである。

はなはだ漠然としているが、以上述べたことで、ぼくの考えている詩は、抜き差ししないほど、生活と結びついているようである。

むかしから、詩についての講座とか、詩の作り方というような本は沢山あるようであるが、そういう本や講座によって、詩がわかったとか、詩が作れるようになった詩人があるかどうか、寡聞にしてそういう詩人があるということをおぼくは耳にしたことがないのである。

そんなことから推察して、詩とはなにかとの問いは、むしろ問う人自身に向けられなくてはならないのではなからうかとぼくはおもうのである。この講座の初回に挙げた例のように、詩とは叫びであるとか、詩とは怒りであるとか等々の答えにしても、結局は教えられたり押しつけられたりしてそのようにおもったのではなくて、詩人自身が探り当てたり発見した結果に違いないのである。

それならば、なんのために詩を書くかという問いにしても、これまた詩とはなにかとの問いとおなじく、矢張りその人自身に向けてはじめて、意味のある問いとなるのではなからうか。ぼくはそこに「詩」と「人間」とが、似通っているものであることを感じないではいられないのである。おそらく人間とはなにかと、なんのために生きるかというように、ことを、考えた経験のある人ならばそれを感じる事が出来るに違いないのである。

つまりは「詩」といい、「人間」といい、それらは求められることによつてその存在を主張し、存在することによつてそれらは、繰り返し追究されなければならない性質のものだからと、ぼくはそうおもうのである。そこで、ぼくは、書くということ、それは、生きるということの同義語のようなものではないかとおもうわけである。前回で、バランスを求めするために詩を書くのであるとぼくは述べたがぼくなりの考え方として、それほど間違つてはいないような気がするのである。

わかつたみたいなのからなみたくないなことをばかりをしゃべってしまったが、ふり返つてみると、浮浪の生活といい汲取屋の生活といい、その他ぼくの経験して来た生活は、ふざけたりおもしろがったりしてそういうことをしたのではなかった。ある意味で、それらはぼくにとって血の出るほどのいびつな生活で、たびたび、死んだ方がましなおもいなどもないのではなかったが、いわば、詩がぼくにそうさせたようなものであり、詩という奴はまったくひどい奴で詩人をそういうめにあわせながら、生きろ生きろと耳うちをしてくる奴なのだ。

この講座を引き受けるに当って、学識その他の設備のないことを残念だとおもったのであるが、それは他に適当な詩人があるはずで、ぼくは読者に、片眼をつむつてのぞいてただければと、あり合わせの節穴みたいなものがまんしてもらったわけである。

おわりに、なんのために詩を書くかとの問いを中心に、くるくる回っている詩人諸家の言葉を、御参考までに引用してみると、金子光晴は「腹の立つときでないと詩を書かない」というのである。含蓄のある言葉であるとおもう。かれの生き方、考え方、詩に対するところ構えなど、かれの姿をほうふつさせるものではなからうか。

北川冬彦は「なぜ詩を書くか、私にとつては、現実の与えるショックが私に詩を書かせるのだ、というより外はない」といい、高橋新吉は「自然の排泄に任ずるのである」といい、村野四郎は「私は詩の世界にただ魅力を感じるから詩を書きます」というのであり、深尾須磨子は「私が存在するゆえに私は詩を書く」といい、田中冬二は「私はつくりたいから、つくるまでであると答えたい」とのことであり、数え立てれば色々の答がなんのために詩を書くかの問いに対して、出沒するのであるが、それらの答えて注目すべきことは、誰もが生から詩を切り離しては、答えられないものであるということなのである。

次の詩は自作であるが、ビキニの灰と箸との結びつけなどから、詩人としてのぼくの作業の一端を紹介することが出来るのではなからうか。

鮪に鯛

鮪の刺身を食いたくなつたと

人間みたいなことを女房が言った

言われてみるとついぼくも人間めいて

鮪の刺身を夢みかけるのだが

死んでもよければ勝手に食えと

ぼくは腹だちまぎれに言ったのだ

女房はふいと横にむいてしまったのだが

亭主も女房も互に鮪なのであって

地球の上はみんな鮪なのだ

鮪は原爆を憎み

水爆にはまた脅やかされて

腹立ちまぎれに現代を生きているのだ

ある日ぼくは食膳をのぞいて

ビキニの灰をかぶつていると言った

女房は箸を逆さに持ちかえると

焦げた鰯のその頭をこづいて
火鉢の灰だどつぶやいたのだ

〔全織新聞〕一九五八年九月七日（二一日）

夏向きの一夜

争えないもので、顔までがいつのまにやらそういう顔つきになってしまったのである。夜は云うまでもないが、昼間でも、街を歩いていると、ぼくはよくおまわりさんから誰何されたのである。それはしかし、顔つきばかりのことではなく風体からしても、ぼく自身の生活を反映しているものなのであって、当時の流行語を借りて云えば、所謂、るんぺんと称されているところのもので、ぼくは路傍で暮らしているような状態にあったからなのである。そんなわけで、ぼくの顔つきや風体は、いかにも、誰何されるにふさわしくなっていたみたいであるが、誰何されることによつて、別に、ひどい目に合わされたこともなければ、豚箱を経験したわけなのでもなかった。ところが、いつ、どんな勘違いをされて、どんなひどい目に合わされないと限らないような、そうおもう一抹の不安が、ぼくにはあったのである。そんな気持を、ある日のこと、佐藤春夫氏に話すと、

「それならばぼくが証明書を書いてあげよう。」

アリスよ あどけない物語を受け取っておくれ
 そしてそれを優しい手で置いておくれ
 幼年の夢が絡みあつて
 記憶の神秘の帯に織り込まれるところへ
 はるか遠い地で摘まれた
 巡礼者のしおれた花環のように

不思議の国のアリス

ルイス・キャロル

第一章 兎穴を下って



アリスは姉とならんで川べりにすわって、なにもしないでいるのがそろそろ退屈になっていた。一、二度、姉の読んでいる本をのぞいてみたけれど、絵もなければ会話もない。「読んでもしょうがないのに」とアリスは思った。「絵も会話もない本なんて」

それで彼女は彼女なりに（なにしろ暑い日なのでとても眠くて頭はぼんやり、だから一生懸命に）考えて、花鎖はなさきをつくるのは楽しいにしてもわざわざ立ち上がってデイジーの花を摘むのはどうしようかとためらっていたのだが、そのとき突然、ピンクの目をした白兎が一羽、すぐそばを走りすぎていった。

それ自体はさしてびっくりするほどのことでもない。のみならずアリスも、兎がこんなふうにとりごとをいうのを耳にしても、べつに妙だとは思わなかった。「たいへん、たいへん、これじゃ遅刻しちまうぞ！」（あとで思い返すと、不思議に思っただったの

に、このときにはごく当り前のことに思われたのだった。)ところが兎は、なんとチョッキのポケットから懐中時計を取り出して、時刻を確かめ、そうしてまた駆け出したものだから、アリスはすつくと立ち上がった。ポケットのついたチョッキを着ていたり、ポケットから懐中時計を取り出す兎などいまのままで見たことがないと気づいて、はっとしたのだ。そして好奇心が燃え上がり、そのあとを追って野原を突っ切ると、ちょうどさっきの兎が垣根の下の大きな兎穴にびよんと飛び込んでいくところだった。

遅れじとアリスも飛び込んで、あとでどうやって出てこられるかは考えもしなかった。兎穴は、しばらくのあいだ、まっすぐトンネルみたいにつづき、それから急に下り坂になった。ほんとうにいきなりなことなので、アリスは止まろうと思う間もなく、どうやらとても深い井戸のようなところへ落ちていくのがわかった。

井戸がとにかく深いのか、落ちていくのがとにかくゆっくりなのか、そのどちらかにちがいない。というのも下へ下へと落ちながら、あたりをきよろきよろ見まわして、つぎはどうなるのか想像する時間がたつぷりあったからだ。まず、彼女は下を見おろし、どこへ着くのか確かめようとしたけれど、暗すぎてなにも見えない。それから井戸の壁をぐるっと見まわすと、戸棚や本棚がぎっしりあって、ところどころ、地図や絵が釘にかかっている

のも見えた。途中の棚にあった瓶を取ると、「オレンジマーマレード」とラベルが貼ってあったが、なかは空っぽなのでがっかりした。瓶を落つこととして、下にいる誰かを死なせてしまつてはたいへんなので、彼女は落ちていく途中の戸棚にそれをなんとかうまく収めておいた。

「ほんとよー!」アリスはひとり思った。「こんなに上手に落つこちられるんですもの、これからは階段をこるがり落ちたつて平気! おうちへ帰つたら、みんなであたしのこと、すごく勇気があるつて思うわ! ええ、お屋根のつぺんから落つこちたつて、あたしぜつたいなんにもいわないから!」(なるほど、そうなつてはなにもいえまい。)

下へ、下へ、また下へ。いったいいつまで落ちていくのだろう。「もう、何マイルくらい落つこちたかしら?」彼女は声に出していった。「もうじき地球のまんなかあたりのはず。ええと、それなら四千マイルくらいかな——」(アリスはこういうたぐいのことをいろいろ学校の勉強で教わつていて、誰も聞いてくれる人がいないいまは知識を披露する格好の機会ではないにしろ、そう唱えてみるのはいい復習になった)「——そう、だいたいそれで正しい距離——でも、緯度だったか経度だったかほどどこまできたわけ?」(アリスは緯度かなにかも経度かなにかも実はちんぷんかんぷんなのだが、なんとなく立派そうな

こういったとたん、トランプは一枚残らず空中に舞い上がり、ひらひらとアリスめがけて落ちてきた。アリスはちょっぴり怖くなり、ちょっぴり癪にさわって、小さな叫び声をあげ、それを打ち払おうとした。

ふと気がつくと、アリスはさっきの川べりで姉の膝を枕に横になっていた。顔にひらひら舞い落ちてきた枯葉を、姉が優しく払いのけているのだった。

「起きていたら、アリスちゃん！」姉がいった。「ほら、もうすいぶん長いことお昼寝したじゃない！」

「まあ、あたし、とつても変わった夢を見たの！」アリスはいった。そして彼女は、これまでの奇妙な冒険のかずかずを一生懸命に思い出しながら、ぜんぶ姉に話して聞かせた。話し終えると、姉は彼女にキスしていった。「ほんとうに変わった夢だこと。でも、もうお茶に急がないとね。遅れてしまうでしょ」そこでアリスは立ち上がり、駆け出した。なんて不思議な夢だったろうと思いつつ、懸命に駆けていった。

けれども姉は、アリスの去ったあともじつとすわったまま、頬杖をつき、沈みゆく夕日を眺めながら、妹のアリスのことを、アリスの不思議な冒険のことを思っていた。するとそのうちに、自分もまた夢を見ているような気持ちになってきた。それはこういう夢だった

まず、妹のアリスが現れた。さっきと同じように小さな手を膝の上でにぎりしめ、明るく輝く目で姉を見上げ——あの声がそっくりそのまま耳にひびき、可愛らしく頭をふってほしよっちゅう目蓋にかかる長い髪を払うあのしぐさが目に浮かび——そして耳をすませると、いや耳をすませるようにしてみると、幼い妹の夢に出てきた奇妙な生き物たちが、まわりいっぱいにざわめいているのがわかる。

足もとの深い草むらをかさかさいわせながら、白兎があわてて駆けていった——おびえた鼠が近くの水たまりをばしゃばしゃと渡っていった——かちやかちやとティーカップの音がするのは、三月兎とその仲間がいつまでたっても終わらないお茶会をしているのだし、運の悪いお客たちの処刑を命じている女王の甲高い声も聞こえる——またもや豚ん坊が公爵夫人の膝の上でくしゃみをはじめ、大皿や小皿ががっしやんがっしやんと砕け——またもやグリフォンのきいきい声、蜥蜴の石筆のきいきいしる音、鎮定されたモルモットのもごもごいう声、それらが、あのあわれな海亀フーのかなたのすすり泣きとまじりあい、あたりいっぱいひろがる。

そうして彼女は目を閉じてすわったまま、自分もまた不思議国にはいり込んだような気

持になっていた。もつともふたたび目をあければ、すべてが退屈な現実が変わってしまったことはわかっている——草むらは風に吹かれてかさかさいっているだけだし、水たまりは葦が揺れて波立っているだけだ——かちやかちやいうティーカップはちりんちりと鳴る羊の鈴、女王の金切声かなきりこゑの叫びは羊飼いの少年の声に変わるだろう——赤ん坊のくしゃみ、グリフォンのきいきい声、ほかのいっさいの妙な音なまよが（そう、彼女にはわかっていて）忙しい農場の入り乱れる物音に変わってしまう——遠くで鳴く牛の声、海亀の泣きじゃくりに取って替わるのだ。

最後に彼女は、この幼い妹がやがてはどんなおとなに成長するのだろうかと思ひ描いた。きつと、一歳ずつおとなになりながら、なおも幼い日々の無邪気で愛くるしい心をもちつづけていくのだろう。あの子と同じような子供たちに取り囲まれて、目を輝かせて聞き入るその子たちに、たくさんの不思議なお話を、たぶんずっと昔の不思議国の夢物語を聞かせているだろう。子供たちの無邪気な悲しみをいっしょになって悲しみ、子供たちの無邪気な喜びをいっしょになって喜びながら、自分のすごした子供の日々を、幸せな夏の日々を思い出しているだろう。

訳者あとがき

トリケと名付けて溺愛した雌猫がいた。トリはトロー(三)、ケは毛、すなわち三毛の意味。しかし名付けられたほうは、トリを鳥と勘違いしているところもあった。鳥が嘴くちばしで突っつくしぐさそっくりに、わが家のほかの猫とたわむれるのだ。「猫に鯉節かつかぶせというのがあるけど、猫に嘴くちばしというのはないぞ」などといってからかったものである。雀を追いかけたりすると、「トリちゃんが鳥さんを追いかけてたりしちゃだめじゃないか」などと語呂あわせで言い聞かせた。

嵐の日に捨てられていた乳離れ間もない子猫だった。そのぶんの不幸は、わが家の一員となつてからすぐに帳消しになったと思う。いや、生まれつきの性格がそうなのか、四六時中、全身から幸せをまきちらす。そしてチェシヤ猫ならぬ知恵者猫ちえしゃ猫となつて成長した。

その猫が、急な病で、この春、わずか三年半あまりの愛くるしい生涯を閉じた。